

# 長畝ふるさと通信

【2017年5月号】

## ■ 田植え終了！ 田んぼに映える逆さ鏡の金北山がキレイ



今年から経費節減対策として、これまで4台で行っていた田植えを3台に減らしてみました。田植えの面積は昨年とほぼ同じなので、当然田植えの日数が増えるのですが、人手不足が解消され、人件費も減らせると見込んでのことです。ところがどっこい、いざスタートしてみると田植え機



が次々と深みにはまり、脱出させるのにトラクターで引っ張ったり、バックホーで引っ張ったりやたらと時間と手間を浪費する毎日。おまけにそのうちの1台が信じられないような故障を起こし、長期の離脱・修理に出たりと散々でした。

結局、5月1日から始めた田植えが全て終了したのは25日でした。昨年より1週間ばかり長期戦になったでしょうか。後半戦は気温も高く、日差しも強かったので、みんな顔は日に焼けて真っ黒です。8条田植え期の「ハチ1号、2号」もすっかり泥だらけで任務を終えました。



毎年のことながら、「ゴールデンウィークって全国民に平等には来ないのね・・・」と思いつつ、毎日朝から晩まで田植え機に乗るのでした。

## ■ 田んぼにはこんなにも多くの土や肥料が毎年投下されている事実

左は播種時に苗箱に投入する培土です。青い大きな袋に入った土は肥料が混ざっており、苗箱の一番下に敷きます。茶色の袋はただの細かい土で、播種した種もみの上に敷き、発芽したときに芽が真っすぐに出るように支える役目をしています。18,000箱の播種に使用する土の総重量は約75トンにもなり、お値段は230万円程。



一方、右のカラフルな袋の山はすべて肥料です。田植えと同時期に田んぼへ散布します。栽培品種によって肥料も散布量も異なりますが、全部で1,500袋くらい撒いてお値段はおよそ500万円。その他に除草剤や殺虫剤などの農薬も500万円近くかかります。必要経費とはいえ毎年よくも飽きずに使うもんだと感心するやら、呆れるやら・・・お米が全ての養分を吸収して毎年リセットされるということでしょうか。

## ■ 経費節減の強い味方になるか？

田んぼに種もみを直接植える「直播」栽培にも取り組んでいます。苗を育てる経費が掛からないのでコストカットには貢献するのですが、初期生育が不安定で、収穫量もそれほど多く望めないのが難点。ちなみにこの田植え期は農機具メーカー・クボタさんの最新デモ機で「GPS機能」搭載型です。ハンドルを握らなくても真っ



すぐに田植えができるといいますが、理屈がイマイチ理解できません。本土の大きな田んぼならその機能が活かされるのですが、佐渡の小さな田んぼでは「猫に小判」といったところ。メーカーは農業の大規模化に向けて機械も機能も大型化してきています。残念ながらうちの組合はついていけませんな～。

## ■ 生存競争は厳しいぞ、明日は我が身か・・・



田植えの最中、干上がった田んぼの水たまりに無数のオタマジャクシが集まっていました。生まれて間もない彼らに自然界は容赦なく厳しさを教えています。この中の何匹が生き残って子孫を残せるのだろうか。明日は我が身の心境で田植えも忘れ、しばらく見ていました。